

ユマニチュード[®]ケア技法を用いた看護介入の 効果に関する文献レビュー

栞子 嘉美, 張 平平, 伊藤 裕佳, 竹内 登美子

富山県立大学看護学部

はじめに

世界的に高齢化が進み、高齢者を対象とする看護ケアのニーズがますます高まっていく中、看護ケアの質向上もよりいっそう求められるようになっていく。日本看護協会の認知症ケアガイドブックには、高齢者のケアでは、その人の価値信念を尊重し、健康への機能回復のみならず、現在の生活の充実を図り、その人らしさを支えることが重要であると明記されている¹⁾。認知症をもつ高齢者への対応が困難となる原因として behavioral and psychological symptoms of dementia (認知症の行動・心理的症狀) が挙げられており、BPSD を緩和する目的でイギリス発祥のパーソンセンタードケア (Person Centred Care)、フランス発祥のユマニチュード[®] (Humanitude)、スウェーデン発祥のタクティールケア (Taktill Care) が導入されている²⁾。これらの中でも、近年、新しい技法として、フランス発祥のユマニチュードケア技法が注目を集めている。

ユマニチュードケア技法は、フランス人で体育学を専門とする Yves Gineste (イヴ・ジネスト) 氏と Rosette Marescotti (ロゼット・マレスコッティ) 氏によって約 40 年前に創り上げられた、知覚・感情・言語による包括的なコミュニケーションメソッドである³⁾。「人間らしくあること (Humanitude)」という哲学をベースにケア技法が体系づけられており、現在フランス国内では 400 を超える医療機関・介護施設がこの技法を導入している。また、ベルギー、ルクセンブルク大公国、スイス、ポルトガル、ドイツ、カナダ、イタリア等に国際支部が設けられ、国際的な展開も

図られている。

ユマニチュードケア技法が日本に導入されたのは 2012 年であり、2011 年に国立病院機構東京医療センター総合内科の本田美和子医師が、フランスのジネスト・マレスコッティ研究所を訪問したことがきっかけであった。2014 年には日本ユマニチュード学会の前身となる「ジネスト・マレスコッティ研究所日本支部」が発足し国内でのユマニチュードケア技法の研修や研究の拠点として活動が始まった。その後、2015 年には旭川医科大学でわが国初となる正規の医学教育にユマニチュードケア技法が導入され、その他の医学部においても徐々に導入され始めてきている。さらに、2017 年には日本ユマニチュード学会が設立され、2019 年に開学した富山県立大学看護学部では全国で初の試みとして、4 年間一貫したユマニチュード教育が継続するカリキュラムが策定されている⁴⁾。ユマニチュードケア技法については多様な実践現場での応用だけではなく、医学系・看護系教育機関での早い時期からの基礎教育への取り組みも開始されている。

ユマニチュードは、「ケアをする者とは何か」という哲学に基づき、具体的な 4 つの柱と 5 つのステップから構成される 1 つのシーケンスを用いて実践する知覚・感情・言語による包括的なケア技法である。ユマニチュードの基本は、「見る」「話す」「触れる」「立つ」という 4 つの柱及び、「出会いの準備」「ケアの準備」「知覚の連結」「感情の固定」「再会の約束」という 5 つのステップからなっている⁵⁾。

ユマニチュードケア技法が日本に導入されてから 10 年になろうとしているが、大坪ら⁶⁾は、7

年を経た時点で日本におけるユマニチュード実践の現状と課題に関する文献的考察を行っている。医学中央雑誌のWeb検索ソフトを用いて、キーワードを「ユマニチュード」として抽出された2015年から2018年の全25件の文献について検討した結果、ユマニチュード継続のための長期的な関わりを捉えた研究や量的研究が期待されること、ユマニチュードの実践によってどのような効果が認められるのかについてを、明らかにする必要があるとの指摘がされていた。

これらを踏まえて本研究では、ユマニチュードケア技法を実施した際、どのような効果があったのかを明らかにする目的で文献レビューに取り組んだ。

研究の目的

先行研究からユマニチュードケア技法を用いた看護介入の効果を明らかにし、日本におけるフランス発祥のユマニチュードケア技法の有用性を検討する。

文献の検索方法と分析方法

2021年10月13日に医学中央雑誌Web版データベースにより、「ユマニチュード」と「効果」とのキーワードを掛け合わせて、全年度の文献を「原著論文」と「看護文献」での絞り込み検索を行った。得られた文献については、筆頭著者の所属と文献の刊行年に関する「文献の属性」及び、精読した文献から読み取れた「ユマニチュードケア技法を用いた看護介入の効果」の2側面から整理・分析した。

結 果

1. 文献の属性

「ユマニチュード」と「効果」のキーワード、および「原著論文」と「看護文献」で絞り込み検索を行った結果、20件の文献が抽出された。このうち、看護学術集會集録集に掲載されていた7件を原著論文に該当しないと見なして除外し、13件の

文献を分析対象とした(表1・表2)。筆頭著者の所属は病院が11件(85%)であり、看護大学が2件(15%)であった。病院所属のうち、筆頭著者は病棟看護師が10名、看護部管理者が1名であった。また、看護大学所属の2名の筆頭著者はすべて看護教員であった。先行文献の刊行年については、2015年に掲載されたものが最も古く、年々増加傾向にはなっているが、年単位の刊行文献数は一桁に留まっている。なお、2019年に刊行されたものが5件であり、最も多かった。

2. ユマニチュードケア技法を用いた看護介入の効果

13件の文献を分析した結果、患者への効果に関するものが8件(表1)、看護師への効果に関するものが4件、看護学生への効果に関するものが1件、合わせて5件であった(表2)。以下、3つの分類内容について説明する。

1) 患者への効果について

患者に対する効果について述べられた文献8件のうち、比較研究が2件、カルテの記録分析が1件、事例研究が5件であり、いずれも4つの柱に5つのステップを意識した看護介入の効果を示すものであった。ユマニチュードケア技法の活用により、患者の尊厳を守った丁寧な関わりが、BPSD症状の軽減・増悪予防・症状の改善や、不穏行動・抵抗・暴力の軽減、せん妄症状の悪化予防、ADL改善・ADLの低下予防などに繋がったとの看護介入効果が報告されていた。

(1) 比較研究から見た看護介入の効果

檀原ら⁷⁾は、急性期病棟における認知症患者の認知機能、BPSD、せん妄、ADLの変化を数値化することで、ユマニチュードの実践効果を明らかにした。ユマニチュードケア技法について病棟看護師の学習会を設け、学習前に入院した21名の患者を非介入群とし、学習後に入院した13名の患者を介入群とした。介入群の対象患者には看護師が日々の看護にユマニチュードケア技法を加えた実践を行った。両群の対象患者の認知機能、BPSD、せん妄、ADL状況を入院3日以内、1週

表1 ユマニチュードケア技法を用いた看護介入の効果に関する文献一覧①

N = 8

分類	刊行年 (著者)	研究題目	研究方法	研究結果	著者所属
患者への効果	2020 (檀原)	急性期病棟における認知症患者へのケアのためのユマニチュード技法を用いた看護の効果について	【比較研究】急性期病棟認知症高齢患者34名を対象にユマニチュード実践前の非介入群と実践後の介入群に分け、認知機能、BPSD、せん妄、ADLの変化を比較検討した。	ユマニチュードケア技法を学習・実践することで、看護師の接し方やケアが変化した。認知症患者にとって心地良い感覚の提供や接し方やケアが変化したことがBPSDの軽減につながった。	病院 看護師
	2019 (坂垣)	認知症高齢患者への口腔ケアの関わり～ユマニチュードを用いることによる受け入れの変化～	【比較研究】認知症高齢患者6名を対象に従来法とユマニチュード法で比較研究を行った。言葉や表情、行動などを含めた20項目の内容で変化を評価した。	「笑わない・硬い表情」、「閉眼している」、「眉間にしわをよせる」の得点が有意に低下し、ユマニチュードを用いた口腔ケアは拒否せずに受け入れてもらえるという効果があった。	病院 看護師
	2019 (青井)	精神科救急病院への認知症高齢者の入退院の経過：症状の改善に向けたケアの現状	【カルテの記録分析】認知症高齢者40名を対象に入退院時の情報をカルテから抽出・分析し、認知症者の症状改善効果を検討した。	入院中の基本的なケアの1つとして、ユマニチュードを用いたケアが取り上げられた。ユマニチュードケア技法がBPSD症状の改善につながった。	病院 看護管理者
	2020 (井上)	認知症高齢患者を対象としたユマニチュードを取り入れた看護介入の効果	【事例研究】認知症高齢患者2名を対象に転入3日目よりユマニチュードを実践し3日目と24日目に認知症高齢者の言動を行動傷害尺度と行動観察評価スケールで評価した。	2事例への看護介入を通して、対象者の置かれている状況に合わせた「見る」「話す」「触れる」「立つ」というユマニチュードケア技法の適切な使い分けで、認知症症状の緩和が図られた。	病院 看護師
	2019 (平島)	Comfort(ケア)の概念モデルに基づく心不全認知症患者への看護介入-自己学習に基づいたユマニチュードを用いて-	【事例研究】心不全認知症高齢患者1名を対象にComfort careのひとつとして、ユマニチュードを用いる看護介入を実践した。	ユマニチュードを用いることでBPSD症状は指標とした項目の推移よりも安楽な状態を示し、ADLも元の生活状態を示す値に戻り、自宅退院という対象の希望にそった帰結が導き出された。	病院 看護師
	2019 (斎藤)	BPSD症状が出現している患者へユマニチュードの手法の実践を試みて	【事例研究】ユマニチュードの手法を用いた看護師の関わりはBPSDの軽減に有効かを検証する目的で、4名の高齢患者を対象とした事例研究を行った。	実践により表情が乏しい、硬かった患者に笑顔が見られるようになり表情も穏やかになったことが確認され、ユマニチュードの手法を用いた関わりはBPSDの軽減に有効であった。	病院 看護師
	2017 (下村)	認知症患者にユマニチュードの関わりを実施して	【事例研究】ユマニチュードを用いた関わりが不穏行動の軽減に効果があるかを検証する目的で、1名の認知症患者を対象とした事例研究を行った。	ユマニチュードを用いた関わりを2週間実施し、観察内容を経過表に記録し、実施前後の睡眠状況、言動、表情の変化から不穏行動の軽減が確認され、ユマニチュードによる介入効果が見られた。	病院 看護師
	2015 (西尾)	せん妄患者に対するユマニチュードの効果-制止しない看護を目指して-	【事例研究】認知症ケアメソッドであるユマニチュードを、せん妄患者に用いて症状の進行を予防する目的で、1名のせん妄患者を対象に研究を行った。	ユマニチュードをせん妄患者に実践した結果、患者を「転落のリスクがある患者」として関わるのではなく、「個人」を尊重した関わりを行ったことで、せん妄症状の悪化を防ぐことができた。	病院 看護師

表2 ユマニチュードケア技法を用いた看護介入の効果に関する文献一覧②

N = 5

分類	刊行年 (著者)	研究題目	研究方法	研究結果	著者所属
看護 師 へ の 効 果	2021 (伊藤)	認知症看護におけるコミュニケーション方法～ユマニチュードを参考に見えた看護師の行動・意識について～	【動画分析】 整形外科病棟の8名の看護師を対象にユマニチュード導入前後の動画分析により、ユマニチュード導入による行動と意識の変化を分析した。ユマニチュードの「見る」「話す」「触れる」の技法について動画分析の評価から検討した。	ユマニチュードの実践により、患者との距離が近くなり、看護師の口調や表情、接し方に変化が見られた。ユマニチュードを実施したことで、患者に「あなたのことを大切に思っています。」という思いを届けることの重要性を理解したということが示され、導入前後の看護師の意識と行動の変化が見られた。	病院 看護師
	2019 (土肥)	急性期病院看護師を対象とした「高齢者の視点を重視した認知症患者への対応」教育プログラムの効果	【比較研究】 65名の急性期病院の看護師を対象に一部の内容として、ユマニチュードケア技法を用いた教育プログラムの効果検証を行った。病棟別に患者を対照群と介入群に分け、介入群に研究者が開発した教育プログラム内容に基づいた看護を行った。	ユマニチュードケア技法を用いた看護介入を3か月間実施した結果、「興奮・多動行動に対する対処困難感」において対象群よりも介入群で、介入後に有意に得点が減少し、「高齢者の視点を重視した認知症患者への対応」教育プログラムが「興奮・多動行動に対する対処困難感」を減少させる効果をもつことが示唆された。	看護大学 教員
	2018 (夏目)	精神科病棟看護師の認知症患者に対する看護の変容に関する調査 ユマニチュードを導入して	【インタビュー調査】 ユマニチュードについて学習経験がある精神科病棟看護師の認知症患者に対する意識と看護の変容を明らかにする目的で、9名の看護師へのインタビュー調査を実施した。	学習後の意識と看護として「関わりが患者や自分自身にもたらす効果の実感」「患者と絆を結ぶための関わりの実践」「患者の思いに寄り添ったケアを意識」「看護師全員でユマニチュードを実践することの効果」「ユマニチュードを実践することの難しさ」が抽出された。	病院 看護師
	2016 (小川)	急性期病院の整形外科病棟における認知症高齢者のBPSDへの対応～ユマニチュード技法の学習を行なった看護師の感情・思考の変化～	【インタビュー調査】 ユマニチュード技法の学習を行った看護師の感情・思考の変化を明らかにする目的で、整形外科病棟の6名の看護師にインタビュー調査を行った。	ユマニチュードを学んで、変化した内容として抽出されたのは、感情では【成功体験からくる喜び】【ユマニチュード効果に対する期待】【苦手意識克服に向けて】、思考では【相手の立場に立った関わり模索】【知識の実践】【ユマニチュード学習による気づき】であった。ユマニチュードの有効性と看護師の感情・思考の変化が明らかになった。	病院 看護師
看護 効果 学 生 へ	2015 (木下)	認知症グループホームの臨地実習に導入したユマニチュードの効果～看護学生がとらえた入所者の反応からの評価～	【実習記録分析】 看護学生の高齢者への関わりの実質向上と学びの深化をねらいとして、認知症グループホームでの臨地実習に導入したユマニチュードの効果を確認するために30名の看護学生の実習記録を分析した。	老年看護学実習の中盤でユマニチュードに関するミニ講義とDVD視聴を行い、その後の実習で学生がユマニチュードの実践を試み、実習記録用紙に記述された内容を分析し、殆どの学生がユマニチュードの実践について肯定的に評価しており、学生の高齢者への観察力を高める効果が得られていた。	看護大学 教員

間目, 2 週間目, 3 週間目, 退院時に評価した結果, 阿部式 BPSD スケールのスコアに有意差が認められ, 認知症患者にとって心地良い感覚の提供といった看護師の接し方の変化によって, BPSD の軽減に繋がったとの介入効果が示された。

また, 坂垣⁸⁾は, 認知症高齢患者に対してユマニチュードを用いて口腔ケアを行うことで, 受け入れにどのような変化があるのかを明らかにする目的で, 6 名の対象者に従来法とユマニチュード法を実施し比較検討した。まず, スタッフ間で方法を統一するために DVD 視聴を行いながらユマニチュードの方法について学習し, 次に資料を作成して口腔ケアの勉強会も実施した。その後, 1 人の患者に対して, 最初の 5~7 日間は従来の口腔ケア方法を, 残りの 5~7 日間はユマニチュード法による口腔ケアを毎日, 日勤帯に実施した。口腔ケアの評価は先行研究を参考に独自に作成したチェック表(言葉・音声・表情・身体表現・行動・気分計 20 項目)を用いた。従来法とユマニチュード法を比較した結果, 表情の項目(「眉間にしわを寄せる」, 「笑わない・硬い表情」, 「閉眼している」)は点数が有意に低下していた。すなわち認知症高齢患者にユマニチュードを用いた口腔ケアは, 言葉や身体表現よりも表情のほうが快の情動を表現しやすいことが考えられ, 拒否せずに受け入れてもらえるという効果が示された。

(2) カルテの記録分析から見た看護介入の効果

青井⁹⁾は精神科救急病院における認知症高齢者 40 名を対象に入退院時の情報をカルテから抽出・分析し, 認知症者の症状改善効果を検討した。入院中の基本的なケアの 1 つとして, ユマニチュードを用いたケアが取り上げられ, 外来受診から入院中のすべての時期にスタッフがユマニチュードケア技法での対応ができるように看護職員の教育の中で, 「見る」「話す」「触れる」「立つ」の 4 つの基本を主としたユマニチュード研修が実施されていた。カルテ情報の分析結果により, 不安や恐怖から日常生活のケアを拒否する認知症高齢者にとって, 丁寧で温かい言葉で自分の存在を認め, 尊厳をもって接するスタッフの対応が

BPSD の軽減に繋がったことが示されていた。

(3) 事例研究から見た看護介入の効果

井上¹⁰⁾は, 認知症高齢患者に対するユマニチュードを取り入れた看護介入の効果を明らかにするために, 認知症行動傷害尺度(DBD スケール)及び認知症高齢者における行動観察評価スケール(NOSGER スケール)を用いた事例研究を行った。具体的には, 暴力的な行為があった 1 事例目の『ケアへの拒否が強く暴力的な抵抗がある時期』では, 「見る」と「触れる」の技法を実践し, 『暴力的な抵抗が少なくなってきた時期』では, 「見る」「話す」を実践しながら, 本人の関心が高い歌などのレクリエーションへの参加を促していた。次に, 拒否や依存的姿勢が強かった 2 事例目では, 『自己の要求が多い時期』では, 必ず目線を合わせて傾聴し, 尊厳を損なわないよう対応し, 『他者の意見を取り入れられるようになった時期』では, 孫に会うという本人の希望に添った目標設定に従って, 自身のバギーを持参してもらい, 「立つ」を重視したユマニチュードケア技法を行っていた。このように対象者の状況に合わせたユマニチュードケア技法の使い分けによって, DBD スケールが 24 点から 15 点(1 事例目), 30 点から 3 点(2 事例目)にまで改善した。また, NOSGER スケールは 109 点から 90 点(1 事例目), 91 点が 76 点(2 事例目)に低下し, 認知症症状の緩和や ADL の改善が示されていた。

平島¹¹⁾は, Comfort Care の一つとしてユマニチュードを用い, BPSD の増悪・ADL の低下を予防する関わりを明確にすることを目的に, 心不全の認知症患者 1 名を対象とした事例研究を行った。ユマニチュードケア技法について自己学習を行った上で, 具体的な方法論を 2 日間のカンファレンスで発信し, 対象とのかかわり方を病棟全体で検討した。また, ユマニチュードに関するパンフレットを作成し, 病棟に常備した。これらを通じて, スタッフ全体がユマニチュードを意識しながら対象への関わりができた。ユマニチュードの 4 つの柱に基づくケア技術を用いた看護介入で, BPSD 症状は指標とした項目の推移よりも安楽な状態を示した。ADL も元の生活状態を示す値に

戻り、自宅退院という対象の希望にそった帰結が導き出されていた。

また、斎藤ら¹²⁾は、ユマニチュードの手法を用いた看護師の関わりはBPSDの軽減に有効かを検証する目的で、4名の高齢患者を対象に事例研究を行った。ユマニチュードに関するDVDや文献を用いて病棟看護師に周知し、立案されている看護計画に対し、ユマニチュードの手法を用いての介入を実施した。その実施内容や患者の反応を受け持ち看護師がSOAPで記録し、研究開始日と開始7日目に「阿部式BPSDスケール」を使用し評価を行った。その結果、阿部式BPSDスケールのスコアは対象者すべてにおいて改善が見られた。看護記録には、目線を合わせ、正面の位置から優しくタッチングしながら声かけ、体に触れ顔を見ながら話す、視界に入るように目の前に座り会話をする等の記載があり、看護師が最も多く行ったユマニチュードの手法は「見ること」と「触れること」であったと報告されていた。

下村ら¹³⁾もユマニチュードを用いた関わりが不穏行動の軽減に効果があるかを検証する目的で、認知症患者を対象とした一事例研究を行った。認知症認定看護師によるユマニチュードの勉強会を実施し、観察事項を記録するための経過記録表を作成して、ユマニチュードを用いた関わりを2週間実施し、実施前後の睡眠状況、言動、表情の変化を検討した。結果として看護師が積極的に声をかけ、穏やかな雰囲気の中で関わられるようになったとのことで、夜間の中途覚醒がある場合でも不穏行動は減少していった。また対象の表情も介入前と比べ笑顔が見られ、他患者や看護師と穏やかに会話することが多くなったとのことであった。

西尾¹⁴⁾は認知症ケアメソッドであるユマニチュードを、せん妄患者に用いて症状の進行を予防する目的で事例研究を行った。ベッド柵から足を出し転落するリスクのある、せん妄患者にユマニチュードの5つのステップにそった実践を行い、「対象の言動」「私の思ったこと・考察」「私の言動」に関する内容をプロセスレコードに記録して分析した。第1のステップ「出会いの準備」では、しっかりとした自己紹介で「あなたに会い

に来た」というメッセージを伝え、自分の存在を理解してもらえた。第2のステップ「ケアの準備」では、歩きたいという発言の際に「歩こうと思われているんですね」と返答し、対象の気持ちを尊重し否定せずに受け入れることで「ケアの準備」に繋がった。第3のステップ「知覚の連結」では、対象の手を触りながら賞賛し、一貫してポジティブな情報を与え続けたことで、心地よく「足をもどす」という促しを理解し受け入れることができていた。第4のステップ「感情の固定」では、前向きな言葉はポジティブな感情記憶を残すといわれており、「早く歩きたい」という言葉を受けて「やる気はいいことです。今度一緒にリハビリしましょう」と話しかけることで、快の記憶が残るように働きかけた。第5のステップ「再会の約束」では、「〇月〇日に伺います」と次にまた来ることを伝えた。その約束の訪室日の際には、看護師の名前を呼ぶ行動が見られたとのことであった。このようにユマニチュードのケアメソッドに基づいて「転落のリスクがある患者」として関わるのではなく、「個人」として尊重した関わりを行ったことで、せん妄症状の進行を防げたことが示された。

2) 看護師への効果について

看護師に対する効果について述べられた文献4件については、動画分析が1件、比較研究が1件、インタビュー調査が2件であり、すべてが認知症高齢者看護に関する内容であった。ユマニチュードケア技法の学習・実践を通して、患者本位のケアへの気づきや患者の思いを大事にする関わりへの模索、葛藤の改善につながる看護困難感の減少、自分の看護に対する再認識、看護に対するモチベーションの向上等の新たな変化が報告されており、ユマニチュードが看護師自身にもたらした効果が報告されていた。

伊藤¹⁵⁾は、整形外科病棟の8名の看護師を対象にユマニチュード導入による行動と意識の変化を分析した。ユマニチュード導入前後の動画分析により、導入後では患者を見る時間は1場面1分あたり5秒から17秒へ増加していた。目線が低くなった割合は5.5%から7.6%に、顔の距離が

30cm 以内に近づいた割合は、35.1%から41.0%に増加していた。また、話しかける位置は、患者の横からが多かったが、正面から話しかける割合が25.5%から30.4%へと増加していた。さらに、患者に触れる時間では1場面1分あたり7秒から17秒へと増加した。患者に触れる技術では、広い面積で包み込むようにゆっくりと摩る行動が増加していた。以上のように、ユマニチュードの実践で患者との距離が近くなり、看護師の口調や表情、接し方に変化が見られた他に、ユマニチュードを実施したことで患者に「あなたのことを大切に思っています」という思いを届けることの重要性を理解したということも示されていた。

土肥ら¹⁶⁾は、65名の急性期病院の看護師を対象に「高齢者の視点を重視した認知症患者への対応」教育プログラムの効果検証に取り組んだ。「患者を尊重し、寄り添うこと」を基本理念としたプログラムにおける教育内容の一部には、ユマニチュードのケア技法を用いた。この研究は急性期病院における認知症患者の症状に対する看護師の対処困難感が減少するかを評価することを目的に、病棟別に患者を対象群と介入群に分け、プログラム内容に基づいた看護を3か月提供した結果を比較した研究であった。その結果、「興奮・多動行動に対する対処困難感」において対象群よりも介入群で、介入後に有意に得点が減少し、「高齢者の視点を重視した認知症患者への対応」教育プログラムが「興奮・多動行動に対する対処困難感」を減少させる効果をもつことが示唆された。

夏目ら¹⁷⁾は、ユマニチュードについて学習経験がある精神科病棟看護師の、認知症患者に対する意識と看護の変容を明らかにする目的で、9名の看護師へのインタビュー調査を実施した。ユマニチュード学習後の意識と看護として、「関わりが患者や自分自身にもたらす効果の実感」「患者と絆を結ぶための関わりの実践」「患者の思いに寄り添ったケアを意識」「看護師全員でユマニチュードを実践することの効果」「ユマニチュードを実践することの難しさ」が抽出され、看護師の意思変化が示された。

また、小川ら¹⁸⁾は、認知症高齢者への対応の中で、ユマニチュード技法の学習を行った看護師

の感情・思考の変化を明らかにする目的で、整形外科病棟の6名の看護師にインタビュー調査を行った。ユマニチュードを学んで変化した感情は、「成功体験からくる喜び」「ユマニチュード効果に対する期待」「苦手意識からの開放」であった。ユマニチュードを学んで変化した思考は、「相手の立場に立った関わりへの模索」「知識の実践」「ユマニチュード学習による気づき」であり、これらとは別に「自分の看護に対する再認識」も見出されていた。

3) 看護学生への効果について

看護学生への効果に関する文献は1件のみであった。木下ら¹⁹⁾は、看護学生の高齢者への関わりへの質向上と学びの深化をねらいとして、認知症グループホームでの臨地実習に導入したユマニチュードの効果を報告した。3年生の2週間の実習の中盤にユマニチュードに関するミニ講義とDVD視聴を行い、その後の実習で、30名の学生がユマニチュードの実践を試みた。その後、ユマニチュードの実践を試みた場面、入所者の反応及び実践後の学生の学びや感想を類似性にしたがって整理した。実践内容はユマニチュードの5つのステップにそって分類した。学生がユマニチュードを実践した場面は入所者とのコミュニケーションを交わした場面やバイタルサインを測定した場面、レクリエーションの実施時などであった。ユマニチュード実践の効果として、＜交流の促進＞や＜スムーズなケアの提供＞、＜快の感情につながる＞、＜驚きの反応が軽減＞などからなる「実践への肯定的評価」が、＜入所者の不安を敏感に察知＞、＜相手の立場に立ったケアの重要性への理解＞、＜自然体での実践＞などからなる「学生への教育効果」が、＜触れることへの戸惑い＞、＜実践・評価の自信のもてなさ＞からなる「実践への躊躇」が抽出された。このように殆どの学生がユマニチュードの実践について肯定的に評価していた。

考 察

1. 看護実践におけるユマニチュードケア技法の

有用性

今回の文献レビュー全体を通して、ユマニチュードを学習した看護師・看護学生が学習後にユマニチュードケア技法を用いた看護実践は、ケアされた患者とケアを実施した看護師らの双方に良い反応が見出されており、認知症看護をはじめとした臨床看護において効果的であったことが示された。この結果から、フランス発祥であるユマニチュードケア技法は文化が異なる日本においても有用であることが推察できた。これらの介入効果は、臨床現場で活躍している看護師が、ユマニチュードケア技法を学習し実践することを通して、患者への関わりについての意識と行動に変容が見られたからであり、「人間らしくあること」という哲学をベースにユマニチュードのケア技法を展開していったことが、大きな要因だと考えられた。パーソンセンタードケアやタクティールケアにおいても「人間らしくあること」すなわち「人間の尊厳」を重視しているが、ユマニチュードケア技法のように体系づけられた日常生活援助技術までは述べられていない。ユマニチュードを学習した看護師は自分自身の担っている重要な役割への認識強化だけではなく、コミュニケーション技法を基盤とした日常生活援助技法であるユマニチュードによって、効果的な看護介入を遂行できたと考えられる。特に4つの柱を同時に複数組み合わせる「マルチ（複数の）モダリティ（要素）・ケア」では、視覚・聴覚・触覚を複数同時に刺激しながらのケアを推奨するものであり、皮膚感覚刺激による脳神経の活性化を意識しながらのケアである。このことと同時に、「患者の尊厳を守り、寄り添う」という看護ケアの本質に基づいた実践が展開されたことが多くの文献から読み取れ、実践の場での効果に繋がったと推察された。

ユマニチュードケア技法を活用することは、ヒューマンケアという看護の原点に立ちかえるきっかけとなる一方、患者本位の最善の看護ケアの実現、ひいては、患者に対する看護ケア力の向上につながる専門的なケア技法の習得・洗練にも実用的かつ有効的であると言える。また、ユマニチュードケア技法の導入で看護師にとって、自分の看護への再認識や自身のケアに自信が持てたこ

と、患者の気持ちに沿ったケアを実践できているという充実感から仕事へのモチベーションが高まったことなどの効果も見出され、ユマニチュードケア技法の活用により看護師自身の変化と成長も読み取れた。日本の看護における「全人的ケア」に関する概念分析を行った荻原ら²⁰⁾は、『「全人的ケア」は、その人が存在を脅かされ、人間らしさやその人らしさの尊重を求めた時にその人の全体を捉えて関わることを基盤とし、その人の存在の脅かしをやわらげる・癒す、寄り添うことを通じて人間らしさやその人らしさを尊重することである。その結果、人間らしさやその人らしさが回復し、さらには関係する者の成長をもたらすものである』と定義し、日本の看護師が「全人的ケア」を具体的に理解し、看護の姿勢や援助行為の意義を深く理解することを可能とし、意図的に実践することで患者に質の高いケアを提供すること、および看護師の成長をもたらすことに貢献することになると述べている。「人間らしくあること」をベースに体系化されたユマニチュードケア技法は日本の看護における「全人的ケア」の内容に共通していると考えられ、今後の活用が大いに期待される。

2. ユマニチュードに関する基礎看護教育への示唆

今回の文献レビューでは、看護学生への効果に関する文献が1件のみであったが、ユマニチュードケア技法の導入で学生が理論と実践をつなぐ体験として意味づけが出来るような教育的関わり的重要性が指摘されていた。ユマニチュードケア技法の基礎教育課程への取り組みの最初は旭川医科大学であり、続いて導入した岡山大学においては、医学部生を対象とした6年間の縦断的研究を行い、知覚、感情、発話に焦点を当てたユマニチュードのケアメソッドによって医学生との共感性が高められ、維持されたことが検証されていた²¹⁾。医療や福祉現場でのユマニチュードのニーズが高まる中、近い将来、医療福祉従事者になる学生への体系的な教育は大きな意義があると考えられる。

3. ユマニチュードに関する研究への展望

今回の文献レビューは、ユマニチュードケア技法を用いた看護介入の効果に焦点をあてて行った。13件のうち11件は病棟単位での研究で事例研究が5件と多かったが、研究内容は認知症高齢者への看護介入としてのユマニチュードケア技法がもたらす効果を示唆するものであった。特に、看護現場で直面した難しいケースや対応困難の状況下での突破口を見つけるために、ユマニチュードケア技法を活用した先駆的な試みとして、地道な研究を実施し、実践現場に応じた看護介入の効果を見出していた点を評価できる。これらの先行研究によって海外から導入されてきたユマニチュードケア技法の有用性も根拠づけられたといえる。このような事例研究の積み重ねによって看護の実践知や、看護介入の効果検証研究に発展していくことが期待できる。なお、ケアの科学的解明については、工学の専門家と医療の専門家らとの共同で、ユマニチュードの技術分析が行われてきており、その成果が報告²²⁾されている。今後は看護職者もこのような多職種連携研究に加わり、ケアの科学的解明に関与することが求められる。このことによって、今まで経験や勘に頼っていた部分の多い看護実践の効果を、数値や図表等で可視化することができるようになり、根拠を示しながらユマニチュードケア技法を実践し広めていくことが可能となる。

超高齢社会の日本では、高齢者の尊厳を支え、全人的ケアを展開する指針の一つとしてユマニチュードが注目され、社会情勢に応じた実践レベルでの研究だと捉えることができる一方、本田ら²³⁾は、「ユマニチュードは認知症ケアだと限定してしまっただけいけない。ユマニチュードの考え方は全ての人に対するものなのだと発信していきたい」と述べている。認知症の人に限らず、すべての看護ケアの対象者への介入研究も必要であり、それに向けての意識改革も求められている。

引用文献

- 1) 日本看護協会：認知症ケアガイドブック，pp59-66，照林社，東京，2016.
- 2) 土肥真奈，叶谷由佳，榎倉朋美ほか：「高齢者の視点を重視した認知症患者への対応」教育プログラムを導入した急性期病院看護師のプログラム実践状況．日本健康医学会雑誌，29（4）：462-468，2021.
- 3) 本田美和子，Geneste Y, Marescotti R：ユマニチュード入門（第1版）．pp4，医学書院，東京，2019.
- 4) 本田美和子：わが国におけるユマニチュード導入の成果と今後の展望．看護管理，29（2）：100-106，2019.
- 5) 本田美和子：優しさを伝えるケア技術．心身医学，56（7）：692-697，2016.
- 6) 大坪昌喜，角マリ子：我が国におけるユマニチュード実践の現状と課題に関する文献的考察．熊本保健学大学研究誌，17：83-94，2020.
- 7) 檀原知里，奈良本敬子，小橋かおるほか：急性期病棟における認知症患者へのケアのためのユマニチュード技法を用いた看護の効果について．長野松代総合病院医報，32：52-53，2020.
- 8) 板垣有香，藤川美紅，近藤理江ほか：認知症高齢患者への口腔ケアの関わり ユマニチュードを用いることによる受け入れの変化．国立病院機構四国こどもとおとなの医療センター医学雑誌，6（1）：134-138，2019.
- 9) 青井みどり，中島紀子，河野保子：精神科救急病院への認知症高齢者の入退院の経過 症状の改善に向けたケアの現状．健康生活と看護学研究，2：32-36，2019.
- 10) 井上里恵，上川麻矢，岩井芽久美：認知症高齢患者を対象としたユマニチュードを取り入れた看護介入の効果．日本看護学会論文集：慢性期看護，50：178-181，2020.
- 11) 平島洸：Comfort（ケア）の概念モデルに基づく心不全認知症患者への看護介入 自己学習に基づいたユマニチュードを用いて．福岡赤十字看護研究会集録，33：54-57，2019.
- 12) 斉藤亜妃，阿部祐太，加藤友里ほか：BPSD症状が出現している患者へユマニチュードの手法の実践を試みて．板橋区医師会医学会誌，23：180-183，2019.
- 13) 下村由佳，中川彩，福山香苗ほか：認知症患者にユマニチュードの関わりを実施して．中国

- 四国地区国立病院機構・国立療養所看護研究学会誌, 12 : 85-88, 2017.
- 14) 西尾那菜：せん妄患者に対するユマニチュードの効果 制止しない看護を目指して. 和：やわらぎ, 1 : 93-96, 2015.
- 15) 伊藤百花：認知症看護におけるコミュニケーション方法 ユマニチュードを参考に見えた看護師の行動・意識について. Best Nurse, 32 (2) : 52-58, 2021.
- 16) 土肥真奈, 杉浦由美子, 杉本健太郎ほか：急性期病院看護師を対象とした「高齢者の視点を重視した認知症患者への対応」教育プログラムの効果. 日本看護管理学会誌, 23 (1) : 11-18, 2019.
- 17) 夏目裕子, 倉本裕介, 夷藤菜保子ほか：精神科病棟看護師の認知症患者に対する看護の変容に関する調査 ユマニチュードを導入して. 日本看護学会論文集：精神看護, 48 : 27-30, 2018.
- 18) 小川裕太, 又川めぐみ, 濱田玲子ほか：急性期病院の整形外科病棟における認知症高齢者のBPSDへの対応 ユマニチュード技法の学習を行なった看護師の感情・思考の変化. 高知赤十字病院医学雑誌, 20 (1) : 67-71, 2016.
- 19) 木下香織, 古城幸子：認知症グループホームの臨地実習に導入したユマニチュードの効果 看護学生がとらえた入所者の反応からの評価. インターナショナル Nursing Care Research, 14 (2) : 145-153, 2015.
- 20) 萩原典子, 水戸優子, 金壽子：日本の看護における「全人的ケア」の概念分析. 日本看護技術学雑誌, 19 : 83-91, 2020.
- 21) Yusuke Fukuyasu, Hitomi U, Kataoka, Miwako: The effect of humanitude care methodology on improving empathy: a six-year longitudinal study of medical students in Japan, BMC Med Educ 21 : 316, 2021.
- 22) Hidenobu Sumioka, Masahiro Shiomi, Miwako Honda, Atsushi Nakazawa : Technical Challenges for Smooth Interaction With Seniors With Dementia: Lessons From Humanitude™ : 2;8:650906. doi: 10.3389/frobt.2021.650906. eCollection 2021.
- 23) 本田美和子, 伊東美緒：ユマニチュードと看護, pp118, 医学書院, 東京, 2019.

A literature review on the effects of nursing interventions using *humanitude*[®] care techniques

Yoshimi KUWAKO, Pingping ZHANG, Yuka ITO, Tomiko TAKEUCHI

Toyama Prefectural University